「戦争を知らない僕達が」

戦争、核兵器、紛争、テロ。調べれば沢山の情報や歴史を知る事ができる。資料も読み調べる事で「悲しく残酷なことだ」「絶対にしてはいけないことだ」ともちろん誰もが思うだろう。でも、どうしてだろう。自分でもとても残念な事に、リアリティーがない事に気付いたのだ。調べる事で、戦争の悲惨さは分かったつもりでいても、それは、教科書や資料で学ぶ知識の一つであり、亡くなった曾祖父母が経験した「戦争」も、僕にとっては歴史上の出来事、年表の中の一つになってしまっている事に気付いた。

曾祖父母とは一緒に暮らしていたわけではない。僕の父は京都に、母は岩手に実家があり、幼い頃から僕は年に数回、両方の実家に泊まりに行った時に、曾祖父母や祖父母に会っていた。どちらの曾祖父母も僕が幼稚園児の時に他界してしまった。遊んでもらった記

憶は沢山あるが、幼かった僕は、戦争の話を直接聞いた事はない。だからなのか、僕の中でまだ、戦争がどこか遠い国の、もしくはずっと昔の出来事で、教科書や資料で学ぶ知識としてしか捉えられていない。

戦争ではないが、僕の中に鮮明に残っている怖い記憶がある。二〇一一年三月十一日一四時四十六分発生「東日本大震災」。その日神奈川の自宅に母と兄といた僕は、大きく揺れる家の窓から、母と兄と庭に飛び出したのを覚えている。揺れがおさまり家に戻り母がテレビをつけると、母の実家である東北地方を震源とした大地震が発生したというニュースが流れていた。母が、家の固定電話や、携帯電話を何度も何度も押しながら

「つながらない。つながらない。どうしよう。」

とボロボロ泣いている姿は今でも忘れられない。ようやくつながった電話で、大声で泣き崩れながら、

「死んだかと思ったあああ。」

と子供の様にギャンギャン泣く母の姿は一生忘れない。岩手県の沿岸部ではなかった母の実家は幸い無事ではあったが、沢山の友人、家、思い出の場所が津波にのまれてしまった。

震災から一年後の夏、僕達家族は、昔、海水浴に行った岩手県陸前高田の海を祖父母と訪れた。そこは、以前のような姿ではなくなっていたのをハッキリと覚えている。全てが流された所にポツンと立っている一本松と、津波で流れつき、陸に打ち上げられたまま置き去りにされた船だけがあった。祖父母が僕に淋しそうに言った。

「おうちゃん。じいじばあばとかき氷食べた の覚えてる？みーんな流されちゃったね。」

自分の目で見た物や、体験した人から語られる言葉や涙はとても生々しく、強烈な印象として残り、時間が経っても歴史上の一つの出来事などではなく、災害の怖さや、生命や

平和の尊さ、当たり前に過ごしている日々の大切さを考えるきっかけの記憶となる。

戦争も同じなのではないだろうか。僕達は「戦争」を知っていても怖さそのものを知らない。だからこそ僕達は戦争を経験した方達から話しを聞く事や、原爆が投下された場所に行く事でその恐怖を知り、戦争や平和について考える記憶となるのではないだろうか。

「戦争」は知識でもフィクションでもない。「事実」なのだ。そして絶対に二度と起こしてはいけないのだ。日本はこの先、誰もが戦争を経験していない時代に向かって行く。平和だね、幸せだねと思うかもしれない。でも、だからこそ、そんな国であり続ける為に、戦争を知らない僕達は、戦争を経験した方達の声を聞き、考え、自分の言葉で伝えつなげていく事が必要だと思った。

いつか僕も広島を訪れ、戦争経験者の方の話を聞き、知識ではなく記憶として残したいと思う。

20 × 20